114
A 23

明治同盟書

年
月
日起草
日發遣
主任

本件ハ首席大臣（西郷侯爵）ヨリ
宮内大臣ヘ提出相成度候

覆書

明年七月ヨリ實施スベキ改正條約ハ陸奥
外務大臣ノ時ニ在テ締結セラレタルモ其ノ
締結ノ氣運ニ到ラシメタル所以ノモノハ實ニ大

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

1107

114
A 23

明治宮内省図書

年
月
日起草
日發遣

主任

覺書

明年七月ニ實施スベキ改正條約ハ陸奥
外務大臣ノ時ニ在テ締結セラレタルモ其ノ
締結ノ氣運ニ到ラシメタル所以ノモノハ實ニ大

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

1107

隈内閣總理大臣ノ嚮キニ外務大臣トシテ
明治二十一年二月ヨリ同二十二年十二月ニ至ル
ノ間ニ於テ鋭意勵精條約改正ノ事業
ニ從事シ苦辛經營籌畫シタルノ勲勞
ニ歸セザル可カラザルモノアリテ存セイ蓋シ條
約改正ノ事業ニ關シ從來歷任ノ當局者
カ維新以還ノ宿望ヲ達スルコト能ハザリシハ
固ヨリ國内ノ事情未タ許サヾリシモノアリ
タルニ職由スト雖モ亦締盟列國カ帝國
ニ對シ無條件ノ均霑ニ依リ最惠國條款
ヲ適用シ共同一致ノ行動ヲ爲シ以テ其ノ
進行ヲ沮滯ナラシメタルコト其ノ最大要素
タリシハ明治六年ノ伊太利談判中止以來ノ
事例ニ依リテ明カナルヲ以テ大隈大臣ハ就
任ノ當初ヨリ現行條約ハ帝國政府ノ締盟
諸國ト各別ニ締結シタルモノナルカ故ニ其改正

ニ関シテモ亦各別ニ單獨ノ開議ヲ要ホス
ルノ権アリトナシ且ツ従来各締盟國ノ取リタ
ル最惠國條款ノ解釋ハ事実ノ肯綮ヲ得タ
ルモノニアラズト主張シ條約改正ノ談判ヲ開始
スルニ先チ神戸山手地所ノ借料ニ関スル問題ヲ
好機トシ本邦駐劄外國公使ニ對シ其ノ列國
各別ノ利害ニ繫ル事項ハ各別ニ協議スルノ
慣例ニ倣ハンコトヲ努メタルニモ拘ラズ區区
各別ノ約定ヲ締結スルニ至イタリテ列國聯合
ニ對スル破格ノ例ヲ創設シ尋デ墨西其國
ト始メテ對等ノ條約ヲ締結スルニ當リ殊更ニ
領事裁判権ヲ撤去スルハ上ハ帝國ノ全土ヲ開
放スベシトノ一項ヲ加ヘタリテ帝國政府ガ最惠
國條款ニ関スル舊釋義ニ従ハザルノ材料トナ
シ締盟國ヲシテ漸次聯合ヲ破リテ各別ニ

條約改正ノ議ヲ開始セシムルノ端緒ヲ啓キ維
新以來合同ノ失導タル英國ヲシテ孤立ノ位
地ニ立タシノ其ノ利底列國ノ行動ヲ掣肘シテ
盟主タル能ハサルコトヲ曉知セシメ他日條約改
正ノ問題再起スルアラバ他國ニ先ンジ帝國政
府ノ提議ヲ欣諾シテ其舊位地ヲ回復セン
トノ意思ヲ懷カシメ遂ニ明治二十七年ノ提出
案ニ同意ヲ表セシムルニ至リタルハ畢竟當初
大隈大臣ノ畫策經營其ノ宜シキヲ得タルニ
職由スルモノニシテ同大臣ガ當時改正ノ機未
タ熟セズ中途ニシテ挫折シ且ツ同大臣ノ爲ノ
最モ悲歎スベキノ不幸ニ遭遇シテ其成功ヲ
見ル能ハザリシモ氏間ニ於ケル同大臣ノ辛苦經
營ハ遂ニ條約改正ノ事業ヲシテ今日ニ於テ
完成ナラシムルノ偉功ヲ奏セシメタリト謂フ可ク
又同大臣ノ最キニ外務大臣在職中ニ於テ

従来関税ノ徴収ニ関シ金貨價額ニ對シ銀
貨ノ計算ヲ以テ従價税ヲ課スルノ慣行アルヲ
従價税計算ノ方法ヲ変更シテハ條約規定
ノ関税ヲ完全ニ徴収スルノ措置ヲ為サヽルヿヲ
期シ列國公使ノ異議ヲ唱フルニモ拘ラズ條約
上有スル所ノ権利ヲ執行スルノ上ニ於テ他ノ
要求ヲ納ルヽノ理由ナシトナシ遂ニ無條件ニテ
為換法ヲ断行シタルノ結果ハ最近十年間ニ
於テ約七百五十萬圓ノ巨額ニ達スル関税
收入ノ增加ヲ見ルニ至リ偉大ノ利益ヲ國庫收
入ノ上ニ及ボシタルガ如キハ其ノ勲功尚ニ顕著
ナリト認ム　同大臣ノ維新ノ大勲國家ノ
柱石トシテ身ヲ以テ國ニ盡シタルノ偉勲ヲ
思召サレ　叡慮特ニ　侯爵ニ進授
仰出ラレ様伺度旨ニ謹テ奏ス

明治　年　月　日起草
同　年　月　日發遣

主任

上奏案

外務次官法學博士鳩山和夫　撰

明治十三年八月中東京大學法學部

外務省

ニ出仕シ尋デ同十八年四月外務権
大書記官ニ任セラレ専ラ取調局長ノ
職ニ在リテ参事院議官補翻譯局長
法科大學教授及法科大學教頭等
ノ數官ニ兼任シ同二十三年一月其職ヲ
退クニ至ルマデ五ヶ年ノ久シキ常ニ重要ノ
事務ヲ擔任シ拮据勵精功績頗ル多ク
就中同二十年二月本官外務大臣ニ任セ

ラレタルヨリ未其在職中本官ヲ輔ケテ外
交ノ事務ニ膺リ施設經營スル所勘ナカ
ラズ現ニ當時ニ於ケル關稅徵收ノ如キハ金
貨價額ニ對シ銀貨ノ計算ヲスルヲ從價
稅ヲ課スルノ慣行アリタルニ依リ金銀貨
相場ノ差ハ收稅上非常ニ國庫ノ損失
ヲ來タスニ至リタルヲスルヲ帝國政府ハ從價
稅計算ノ方法ヲ變更シテ條約ニ據

り規定セル關稅ノ徵收ヲシテ完全ナラシメ
ンコトヲ期シ列國ニ使ノ同意ヲ求メタルモ
帝ニ其ノ同意ヲ得ルコト能ハザルノミナラズ却テ
此ノ變更ノ報酬トシテ別ニ讓歩條件ヲ
提供シテ要求シ來タル所アリタルニモ拘ハラズ條約
上正當ノ指定ニ係ル稅率ヲ完全ニ徵收スル
ニ方リ他ノ何等ノ讓歩ヲモ要求セラルヽノ
理ナシト爲シ遂ニ無條件ニテ爲換法ヲ斯行
シタル爲ノ此ノ變更ニ依リ其ノ今日マテ最
近十年間ニ於ケル國庫ノ收入上約七百五
十萬圓餘ノ增加ヲ見ルニ至リタルガ如キ實
ニ同人贊襄ノ功與テ力アリト謂フ可シ又
條約改正ノ事業ニ關シテハ明治初年ヨリ
歷任ノ當局者ニ於テ辛苦經營シタルニモ拘
ラズ種々ノ障碍ニ遭遇シテ其ノ進行ヲ中止
シ漸ク陸奥外務大臣ニ依リテ改正ノ實効

ヲ奏スルニ至リタルモ畢竟明治二十年ノ
条約改正ノ談判ヲ開始スルニ當リ往来各
締盟国ガ帝国政府ニ對シテ執レル所行
動ヲ打破シ無條件ノ均霑ヲ最惠国條款
ニ適用スルコトヲ排斥シ且ツ墨西其国ト始
メテ對等ノ條約ヲ締結シテ以テ其ノ地歩ヲ
作為シタルニ職由セズンバアラズ是レ實ニ同人等ガ
本官ヲ輔翼シテ畫策宜シキヲ得タルノ
功多キニ居イト謂ハサル可カラズ其他同人
ハ法典調査會委員トナリ或ハ鐵道會議
議員トナリ或ハ貴議院議長トナリ並ニ
勤勞アリ同人ノ国家ニ勲勞アルヨト雖
ニ前述ノ如ク顯著ナルモノアルニ依リ翼クハ
以降特ニ同人ニ授爵ノ榮典ヲ賜ハ
ラレコトヲ茲ニ謹テ奏ス
又本文末段「以降」以下ヲ左ノ通リ

外務省

相當ノ叙勲被仰出年金御加
賜相成候様仕度旨謹テ奏ス

明治三十年月日

外務大臣伯爵大隈重信

明治　年　月　日起草
同　年　月　日發遣

主任

上奏案

特命全權公使加藤高明義明治二十年
一月始メテ外務省ニ出仕以来外務大藏両

外務省

省ニ於テ數官ニ歴任シ常ニ重要ノ職務ヲ
擔任シテ鋭意勵精功勞尠ナカラズ就中本
官ガ外務大臣トシテ明治二十一年二月ヨリ翌二
十二年十二月ニ至ル在職中ニ於テ秘書官ノ
任ヲ兼テ本官ヲ輔翼シ外交上樞要ノ事務ニ
從事シ國稅徵收ノ如キ從來ノ慣行ヲ破リ
締盟國ニ對シ無條件ヲ以テ從價稅計算ノ
方法ヲ変更シ今日ノ爲換法ヲ設定シタル為ノ

其ノ今日マデ國庫ノ收入上約七百五十萬圓ノ
增加ヲ來タスニ至リタルガ如キ實ニ同人參畫ノ
功與テ力アリト謂フ可シ又條約改正ハ漸ク
陸奥故外務大臣ノ時ニ當テ其ノ實効ヲ奏
スルニ至リタルモ當初各締盟國ガ帝國政府ニ
對スル無條件ノ均霑ヲ最惠國條款ニ適用ス
ルコトヲ拒ミ締盟諸國ノ帝國政府ニ對スル
合同一致ノ行動ヲ打破シ且ツ墨西其國ト始メテ

對等ノ條約ヲ締結シテ陽ノ其ノ地歩ヲ
作為シ然ニ依リ茲ニ成果ヲ見ルニ至リタルモノ
ニシテ實ニ同人ノ本官ヲ輔ケテ經營シタルノ
功多キニ居レリト謂フヘシ同人ハ明治廿七八年
戰役及清國政府ニ對スル償
金ニ関シ已ニ勲勞賜金等ノ賞與アリタルモ
同人亦此ノ功勞ハ尚ニ顯著ナルヲ認ムルニ依
リ翼ハ以降特ニ同人ニ授爵ノ榮典ヲ
賜ハランコトヲ茲ニ謹テ奏ス
又ハ本文末段「以降」以下ヲ左ノ通リ
相當ノ勲勞ニ依リ仰出年金御加賜
相成候様仕度成段謹テ奏ス
明治三十一年　月　日
外務大臣伯爵大隈重信

明治　年　月　日起草
同　年　月　日發遣

主任

上奏案

當省雇未國人デニフン義ハ帝國政府ノ傭聘ニ應シタル以來十有九年ノ久シキ帝ニ外

外務省

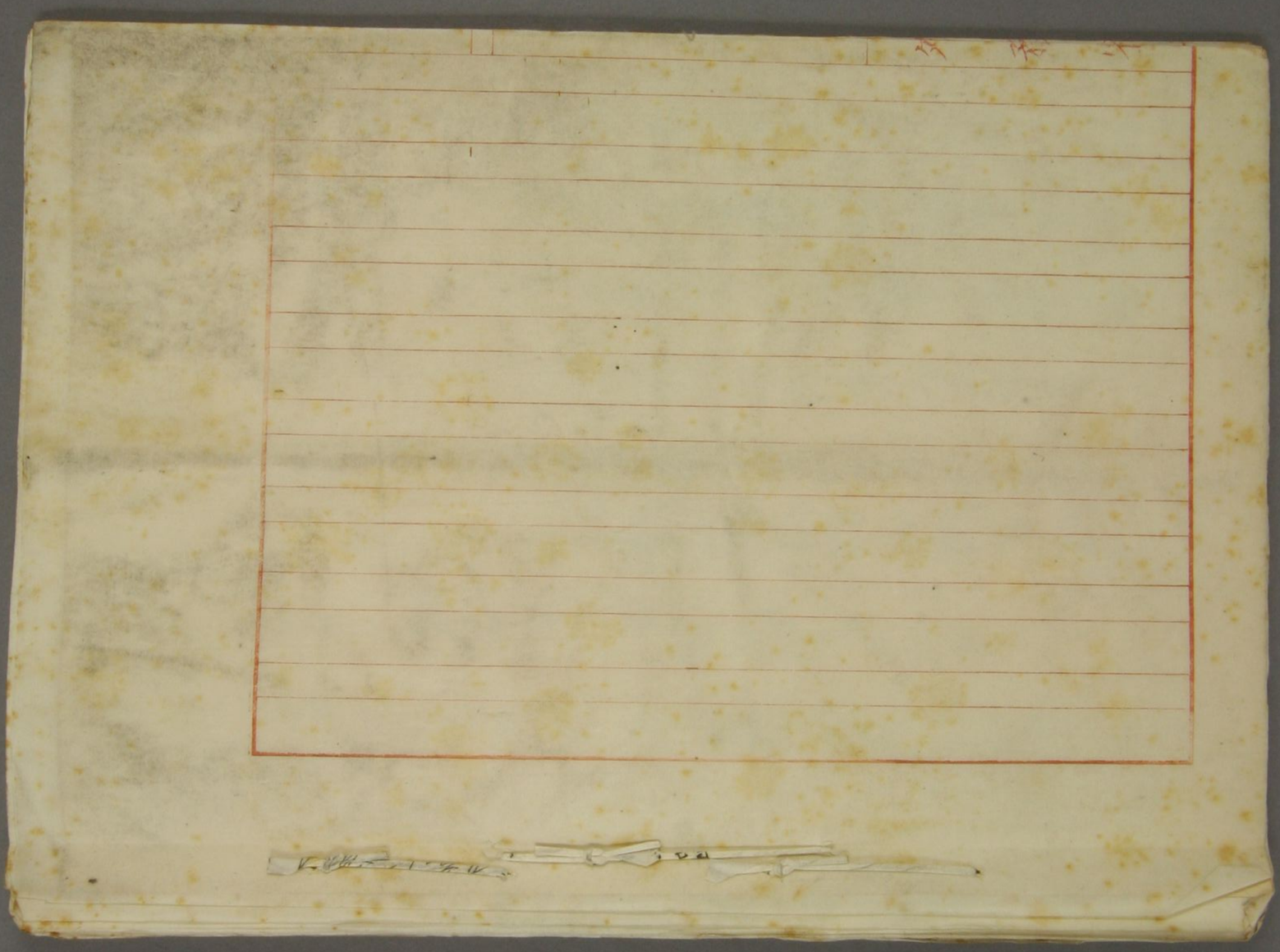
外務省

交上重要ノ事務ニ関シ顧問ノ任ニ膺リ拮据勉励能ク其任務ヲ全フシ就中身ヲ條約改正ノ事業ニ委ス其間ニ在テ外務大臣ノ交迭アリ往々ニシテ其ノ事業ノ進行上沮滞ヲ来タスベキ障碍ニ遭遇スルニモ拘ラズ不屈不撓ノ精神ヲ以テ終始一貫遂ニ帝国政府ノ維新以来ニ於ケル宿昔ノ希望ヲシテ完成セシムルニ至リタルハ全ク同人賛襄ノ功與テ力アリト謂フ可シ就中本官ガ明治二十年及二十一年間ニ於テ外務大臣在職中従来関税徴収上金貨價額ニ對シ銀債ノ計算ヲ以テ従價税ヲ課スルノ慣行アリタルヲ廃止シテ列国公使ノ異議アルニモ拘ラズ為換法ヲ断行シタル為メ其ノ今日マデ約七百五十萬圓ノ国庫ノ收入上増加ヲ来タシタルガ如キモ亦同人參畫ノ功與テ力アリシニナラス當時條約改正ノ上ニ於テ一大障碍タリシ

各國ノ帝國政府ニ對スル共同一致ノ行動ヲ打破シ
無條件ノ均霑ヲ最惠國條款ニ適用スルコトヲ
排斥シ且ツ墨西其國ト始メテ對等ノ條約ヲ締
結シタルニ依リ該ニ條約改正ノ實効ヲ奏スル上ニ
於テ偉大ノ効果ヲ奏シタルガ如キ亦同人贊襄ノ
功勞ト謂フ可シ洵ニ其ノ功績顯著ナリト認ム
蓋シ以降同人ニ旭日章及同章ニ對スル
年金下賜被仰出候樣仕度旨謹テ奏

ス

明治三十一年　月　日

外務大臣伯爵大隈重信

外務省